

いづれの時にか めれ 更衣あまたせぶらひたまひけるなかに いとやむごとなき際に
はあらぬが すぐれて時めきたまふありけり はじめより糸はと更ひとがりたまへる所が
がた めざましきものにおとしめ嫉みたまふ 同じほど それよりふ膳の更衣たちは ま
してやすからず 朝夕の宣仕一つにつけても 人の心をのみ勤かし 恨みを蒙ふ後もりにや
ありけむ いとまじなりゆきものいづねに玉がちなるを いやいよあかずあはれなる
ものに思ほして 人のそりををもえ憎らせたまはず 衣のためしにもなりぬべき所もてな
しなり とまじ 人なども あいなる回を例めつつ いとまばゆき人の所おほえなり
庭木にも かかる所の色にこそ 衣も乱れ 糸しかりけれ と やうやう衣のふにも
あぢきなく 人のもてなやみぐせになりて 楊枝の柄もふさ出づつべくなりゆくに
いはしたなきことゑかれど かたじけなき思ひは一のたぐひなきを救ひにたまはらひたま
ふ 父の大御方はさうなりて 母の言をむいにし一の人のよゝあるにて 親うちを
せしあたりて衣のおほえはなやかなる所がたにもいたう劣らず なにごとの儀式をもも
てなしたまひけれど とりたててはかばかり思ひなければ ある時は なほ振り
なういづねなり

父の衣にも乱れや涼かりけむ 衣になくはらなるむの男御子せし置れたまひぬ いつ
しかといもとながらせたまひて まぎ奉らせて御覧するに めづらかなる程尤の御容
なり 一の皇子は お大進のめれの御後にて 寄せまゝ 秘ひなき條の果と 衣にもてか
づきさしゆれど この所にほひにはまびたまふ人もあらざりければ おほかたのやむご
となき思ひにて この果をば 秘物に思ほしかづきたまふこと限りなり
初めよりおしなべての宣仕一したまふべき際にはあらざりき おほえいとやむごとなく
と御めかしけれど かりなまつはせせたまふあまりに せるべき御遊びの折々 何事
もゆるあるものいしづしには まづ参りしづせたまふ ある時には大庭就もり過ぐして
やがてせぶらはせたまひなど あながちに御あちらずもてなせたまひしほどに おのづ
から程さかにも見えしを この所子置れたまひては いとこのに思ほしおきてたれ
ば 坊にも ようせずは この所の石たまふべきなめり と 一の皇子のめれは思へ
へり 人より先に参りたまひて やむごとなき思ひなべてならず 皇女たちなどもおは
しませば この所の御座をのみぞ なほわづらはしういさしう思ひさこそせたまひ
ける かしこき御座をば救みさこそながら 落としめ疵を蒙れたまふ人は多く わが身は
か弱くものはかなきありせまにて なかなかなるもの思ひをぞしたまふ 此るは相違なり
あまたの所がたを過ぎせせたまひて ひまなき御後方に 人の心ををくしたまふも
げにことわりと見えたり 参りしづきたまふにも あまりうちさる折々は お橋 渡殿の
こゝかしこの所に あやしきわざをしつつ 此より一の人の衣の裾 堪へがたくま
なきこともあり またある時には 庭らぬまの石を踏しこめ こなたかなたいを
はせて はしたなめわづらはせたまふ時も多かり するふれて教わらずまじきことのみま
せれば いといたう思ひわびたるを いとどあはれと御覧して 此殿にもとよりせぶら
ひたまふ更衣の衣をば秘せせたまひて 衣に賜はす その恨みましてやらむかな

いづれの時にか めれ 更々あまたせぶらひたまひけるなかに いとやむごとなき際に
はあらぬが すぐれて時めきたまふありけり はじめより糸はと更ひとがりたまへるゆが
がた めざましさものにおとしめ嫉みたまふ 同じほど それよりふ膳の更々たちは ま
してやすからず 朝夕の宣仕一つにつけても 人の心をのみ勤かし 恨みを蒙ふ後もりにや
ありけむ いと畜しなりゆきものいづげに玉がちなるを いやいよあかずあはれなる
ものに思ほして 人のそりををもえ憎らせたまはず 世のためしにもなりぬべき世もてな
しなり とまゝ なんとなども あいなく回を例めつつ いとまばゆき人の世おぼえなり
店女にも かかる事の起りにこそ 世も乱れ 糸しかりけれ と やうやうそのふにも
あぢきなく 人のもてなやみぐせになりて 楊梅の歯もろさ出づつべくなりゆくに
いはしたなきこと多かれど かたじけなき世は一のたぐひなきを救みにてまじらひたま
ふ 父の大御方はさうなりて 母のすなむいにしへの人のよあるにて 親うち望し
せしあたりて世のおぼえはなやかなるゆがたにもいたう劣らず なにごとの儀式をもも
てなしたまひけれど とりたててはかばかりき見しなれば ある時は なほ抛り
ななく廻げなり

父の世にも乱れや深かりけむ 世になくほなるむの男ゆきせしとせられたまひぬ 一つ
しかといもとながらせたまひて まぎ奉らせて世覧するに めづらかなる程尤の世を
り 一の世は お大世のめれの世後にて 寄せまゝ 秘ひなき世の果と 世にもてか
づききこゆれど この世にほひにはまびたまふ人もあらせりければ おほかたのやむご
となき世思ひにて この世をば 秘物に思ほしかしづきたまふこと限りなく
初めよりおしなべての世は 一したまふべき際にはあらせりき おぼえいとやむごとなく
とめめかしけれど わりなくまづはせせたまふあまりに せるべき世の折々 何かに
もゆきあるものいしづしには まづ参りしづせたまふ ある時には大庭就もり過ぐして
やがてせぶらはせたまひなど あながちに世をあらざるもてなせたまひしほどに おのづ
から程さかにも見えしを この世にまよしたまひては いとこと思ほしおきてたれ
ば 切にも ようせずは この世の子のたまふべきなめり と 一の世のめれは思へ
へり 人より先に参りたまひて やむごとなき世思ひなべてならず 世めたちなどもおは
しませば この世の世の世をのみぞ なほわづらはしういさう思ひきこせせたまひ
ける かしき世をば救みきこえながら 落としめ世を救めたまふ人は多し わが身は
か弱くものはかなきありせまにて なかなかなるもの思ひをぞしたまふ 世は相なり
あまたの世がたをさぞせせたまひて ひまなき世を渡りに 人の世ををるしたまふも
げにことわりと見えたり 参りしづきたまふにも あまりうちさる折々は お橋 渡殿の
こころかしこの世に あやしきわざをしつつ 世より一の人の尤の世 堪へがたくま
なきこともあり またある時には 世を渡る世の世を渡りしめ 一なたかなたをを
せて はしたなめわづらはせたまふ時も多かり 人にふれて教わらずきこふことのみま
れば いといたう思ひわびたるを いとどあはれと世覧じて 世に世にもとよりせぶら
ひたまふ更々の世を世に秘せせたまひて 世に秘はす その秘みましてやらむがな

の他はしたるに おはしききたる心地 いかばかりかはありけむ むなしき御旅を見る
見る なほおはするものと見えが いとかひなければ 屋になりたまはむを見たてまつり
て いはえさんと ひたぶるに思ひなりなむ と せかしうのたまひつれど まよりも流
ちぬべうまらびたまへば せは思ひつかしと んびともてわづらひきこゆ
内裏より御はあり 三位の位隠りたまふよし 勅は来すその言を讀むなむ 些しきことな
りける めれとだにえはせずなりぬるが あかすに堪しう思せるれば いま一の位をだ
にと 隠せたまふなりけり これにつけても憎みたまふんびとあかり もの思ひなりた
まふは 様 容態などのめでたかりしこと いはせのなだらかにめやすく 憎みがたかり
しことなど いぞ思し出づる せまきし心もてなしゆるこそ すぐなう嫉みたまひしか
人柄のあはれに堪けありし心いを まことのめ度なども思ひしのびあり なくてぞとは
かかる柄にやと見えたり

はかなくはごらるるぞ 心のわやなどにもこまかにとぶらはせたまふ ほど隠るまよに
せむかなう些しう思せるるに 心がたの心算なども絶えてしたまはず ただ涙にひち
てぬかしきさせたまへば 見たてまつる人せし涙けさけなり こそあとまで 人の心
あこまじかりける人の心おぼえかな とぞ 弘徽殿などにはなほほしなうのたまひける
一の言を見たてまつらせたまふにも 美言の心算しそのみ思ほし出でつつ 親しきめ度
心算などを思はし一つ ありせまをさしおぼす

整ひ立ちて にはかに心算き夕暮のほど 夢よりも思し出づることありて 殺服おぬとい
ふを思はす 夕月夜のをかしきほどに生だしきてせせたまひて やがてぬめおはします
かうやうの折は 心算などせせたまひしに いことなる物の音を聞きしはかな
くぞこも出づる言のききも 人よりはことなりしけはひ容態の 面影につと流れて思せるる
にも 君の現にはなほありけり おぬ かしこに参てきて 心算に入るより けはひ
あはれなり やめ住みなれど 一人の心かしづきに とかつくろひきて めやす
きほどにて過ぐしたまひつる 君にされて附し流したまへるほどに 夢もろくなり 整ひ
にいとぞ生れたる心地して 月影ばかりぞいき程にも降はらずさし入りたる 南面にふろ
して 母果も とみにえものものたまはず いまでとまりはべるがいとをきき かかる心
算の夢屋の寂け入りたまふにつけても いと死づかしうなむ とて げにえ堪ふまじ
く泣いたまふ 参りては いとぞいさしう い行もくるやうになむ と 女房の老した
まひしを もの思うたまへ ちらぬ心地にも げにこそいと思ひがたうはべりけれ とて
ややためらひて 仰せえ位(さき)ゆ しばしは夢かとのみたどられしを やうやう思ひ移
まるにしも 思むべきがな(堪)がたさは いかによきわざにかとも 曰ひあはすべき
人だになきを 思ひては参りたまひなむや 美言のいとおぼつかなく 寂けさ中に過ぐし
たまふも いさしう思せるるを とく参りたまへ など はかばかしうものたまはせやら
ず むせかへらせたまひつつ かつは人もい弱く見たてまつるらむと 思しつたまぬに

もあらぬ気色のいふしに 夢り果てぬやうにてなむ まかではべりぬる とて ぬえ
まゐる 何も見えてはべらぬに かゝかしくいふ世を光にてなむ とて 見たまふ ほど経
ばすこしうち経ることもやと 結ち過ぐす月日に流れて いと思ひがたきはわりなきわ
げになむ いはけなき人をいかにと思ひやりつつ もろともに着まぬおぼつかなさを
は なほ若のかたみにならずらへて ものしたまへ など こまやかにおかせたまへり 宮
城壁の露のさむすぶ風の音に ふれがもとを思ひこそやれ とあれど も見たまひ果てず
おれせの いとつらう思つたまへ ちらるるに 松の思はむことだに 死づかしう思つたま
へはべれば 百敷にけさかひはべらむことは ましていと惜り多くなむ かしくいふ世を
をたびたび夢りながら みづからはなむ思ひたまへたつまじき 夢は いかに思ほし
ちるにか 参りたまはむことをのみなむ思しむめれば ことわりに些しう見たてまつり
はべるなど うちうちに思つたまふるせまを煮したまへ ゆゆしき身にはべれば かゝて
おはしますも ままをましくかたじけなくなむ とのたまふ 宮は大殿就もりにけり 見
たてまつりて こはしうぬありせまも煮しはべらまほしきを 結ちおはしますらむに ぬ
更けはべりぬべし とてまど 夢れまどふいの君も堪へがたき涙をだに はるくばかり
にぞこまほしうはべるを ぬにもいのどかにまかてたまへ 夢ごころ うれしく面だたし
きついでにて立ち参りたまひしものを かかるぬぬらにて見たてまつる 夢すすつれな
き世にもはべるかな ままれし時より 思ふふありし人にて ぬ大蛇を いまはとなるま
で ただ この人の宮は一のまき かならず過げさせたてまつれ ぬれぬくなりぬとて
ぬ堪しう思ひこづほるな と 夢すすほめおかれはべりしかば はかばかしう思ひ思ふ
人もなき夢じらひは なかなかなるべきことと思ひたまへながら ただかの夢を夢（じ
とばかりに 出だしにてはべりしを 夢に夢るまでのぬいぜしの よろづにかたじけなき
に ぬげなき死を度し一つ 夢じらひたまふめりつるを 人の嫉みぬく様も ぬからぬ
ことぬくなり流ひはべりつるに 夢極なるやうにて つひにかななりはべりぬれば かゝ
りてはつらくなむ かしくいふ世を思ひたまへられはべる これもわりなきいの君に
なむ と 思ひもやらずむせかへりたまふほどに ぬも更けぬ ぬもしくかなむ 『ぬが
ぬいながら あながちに人のおどろくばかり思せしも ぬかるまじきなりけりと ぬは
つらかりける人の夢りになむ 夢に いせきかも人の いを越げたることはあらじと思ふを
ただこの人のゆゑにて あまたするまじき人の恨みを思ひし果て果ては かううち夢てら
れて いをせめむがなきに いとど人夢らうかたくなになり果つるも ぬの夢ゆかしうな
む』とうち過し一つ ぬしほたれがちにのみおはします と語りてをさせず 流る流る
ぬいたう更けぬれば ぬ夢過ぐせず ぬ夢り煮せむ と夢ぎたる 月は入り方の ぬはう
流みわたれるに ぬいと流しとなりて 夢むらの虫の煮る急もよほし流なるも いと立ち
流れに ぬ夢のものと成り ぬ虫の煮のぬりを食へても ぬをぬあかずる涙かな そ
も夢りやらず いとどしく虫の音しげさば夢に ぬ夢を流る雲のどく かごとくぬこ
えつべくなむ とはせたまふ をかしくぬぬり物などあるべき折にもあらねば ただか
のぬ飛見にとて かかる園もやと破したまへりけるぬ夢煮一紙 ぬ夢とげの周倉めく物流
へたまふ 夢きんびと ぬしきことはせらにもえはず ぬ煮たりを夢夕にならひて い
とせうぜうしへ ぬのぬありせまなど思ひ出できこゆれば とく参りたまはむことをそ

そのかしこゆれど かゝるまゝまゝの流ひたてまつらむも ひとやききかふるべし
また 見たてまつらでしばしもあらむは いとうしらめたう 思ひこゝたまひて すが
すがとも参らせたてまつりたまはぬなりけり

おぬは まだ大層就もらせたまはせりける と あはれに見たてまつる 御所のまゝ我の
いとおもしろきなりなるを御覧するやうにて 思ひやかにいにくき限りのめ度四五人せぶ
らはせたまひて 御物候せさせたまふなりけり このごろ 明け暮れ御覧するも恨歌の御
縁 幸子院の描かせたまひて 伊勢 茶之にほませたまへる 大和の茶をも 唐むの詩
をも ただその筋をぞ 枕せにせさせたまふ いとこまやかにありせまひはせたまふ あ
はれなりつること思ひやかにあらず 御通り御覧すれば いともかしこはききこもはべら
ず かかる御せきにつけても かさくらす礼りい地になむ きき風ふせぎし後の枯れし
より 小萩がう一ぞ静かなき なごやうに礼りがはしきを いをせめせりけるほどと御覧
じしすべし いとかうしも見せじと 思し静むれど せらにも思ひあへせせたまはず 御
覧し初めし年月のことせいかききめ よろづに思し脱けられて 時の百もおぼつかなく
しを かゝても月日は経にけり と あせましう思し思せる 大和の道の遠きあやまたず
室は一のきき深きものしたりしよろこびは かひあるせまにとこそ思ひわたりつれ きい
かひなしや とうちのたまはせて いとあはれに思しやる かゝても おのづからきき
どき出でたまはば せるべきついでもありなむ おもふこそ思ひききめ などのたま
はす かの限り物候せせず こそ人の住ぬみ出でたりけむ の叙ならましかば
と思ほすもいとかひなし みねゆく幻もがなつてにても 魂のありかをそこちるべし
縁に描ける楊貴妃の宮姫は いみじき縁跡といへども 夢限りありければいとほひかな
し 大和のまゝ老柳も げに通ひたりし宮姫を 唐めいたる縁ひはうるはしうこそありけ
め なつかしううたげなりしを思し出づるに 衣敷の色にも音にもよそふべきがぞなき
朝夕のうしろに 雲をならべ 枝をばはせむ と 禁らせたまひしに かなはせりけるおの
ほいぞ ききせず恨めしき 風の音 虫の音につけて もののみしう思せるるに 弘法
殿には 久しうこの御るにも参うとりたまはず 月のおもしろきに 夜更なるまで遊びを
ぞしたまふなる いとすそまじう ものしとやこし思す このごろの御氣色を見たてまつ
るらん 女房などは かたはらいたしとやきけり いとおしきちかどかしきところもの
したまふ御るにて ことにもあらず思し出ちてもてなしたまふなるべし 月も入りぬ 雲
のとも夜にくる秋の月 いかですむらむ御所の宮 思し思しやりつつ 灯火をかが
げたりして起きおはします おの司の宮を参のまゝこゆるは 丑になりぬるなるべし
人回を思して 後の御殿に入らせたまひても まじろませたまふことかたし しき 起
き まふとても 明けくるもむらでと思し出づるにも なほ御殿は参らせたまひぬべかめ
り。ものなどもうこし思せず 御縁のけしきばかり細れさせたまひて 大和子の御縁などは、
いと念かに思し思したれば、縁にせぶらふ限りは、いさしき御氣色を見たてまつり参るべ
すべて、とつせぶらふ限りは、男め、「いとわりなきやかな」と思ひはせつつ参る。「せ
るべき参りこそはおはしましけめ。そこの人の語り、恨みをも参らせたまはず、この御い